

卒業臨床研修を振り返って



江田 雅志

高 知大学医学部卒業後、高知大学医学部附属病院での2年間の臨床研修を無事終えることができました。医師として、社会人として右も左もわからない状況の中で始めましたが、諸先生方、スタッフ、患者さんなど多くの人の支えのおかげで少しでも成長できた自分がいることに感謝しております。

学生時代は地域で必要とされる医師という漠然とした目標しか持っておらず、まずは内科全般を研修したいという思いで研修を開始しました。内科を中心に放射線科、皮膚科、精神科などをローテートさせていただき、諸先生方に時に優しく、時に厳しく指導していただく毎日でした。学生時代に耳にした「国家試験と臨床の場は全然違う」の意味を実感し、臨床の難しさそして面白さに一喜一憂する一方で、臨床医としての考え方、心構えなど今後の人生の礎となる部分を多く学ばせていただきました。「目の前にいる患者さんに対して何ができるか必死に考え、悩み、自分にできるベストを尽くすこと。」とある先生に教えていただいた言葉を、これからの長き医師人生における教訓として心に留めております。同じ疾患を持った患者さんでも、生い立ち、生活の状況、死生観などは人それぞれであり、医師に求めることも様々です。目の前の患者さんにとっての最適な生き方、時には死に方を考え、それを実行していける医師を目指していきたいと思えます。

将来は総合診療医として地域の病院・診療所に従事することを目標とし、後期研修は総合内科医として県内の公立病院を中心にローテートさせていただくこととなりました。現在の日本は超高齢社会である一方で、医師の過疎化、偏在化が問題視されており、高知県においても総合病院へ行くことが困難な地域が多くみられるのが現状です。そうした地域の人たちでも安心した生活が送れるにはどうしたら良いか、自分には何ができるか、その答えを探してこれからも精進していこうと思えます。



小児思春期
医学講座
西本 由佳

私 は、この春に初期臨床研修を終え、現在は本院の小児科で勤務しています。

初期臨床研修では専門とする科以外の研修も行います。私も小児科以外に、内科・救急・麻酔科・ICU・地域医療機関(橿原病院)などで研修をさせていただきました。初期臨床研修の2年間では、common diseaseを学ぶことや全身管理ができるようになることが求められているのだと思います。私は、最初の1年間は高知赤十字病院で内科疾患や救急疾患を学び、2年目は大学病院でより専門の領域について学ぶことができました。

私にとって、大人の患者さんをたくさん診ることができたことが1番良かったです。子供と大人は同じではありませんが、全身管理を行う時の基礎となる考え方などは共通した部分があると思っています。また、1年目には何度か患者さんの死と直面しました。もっとできることがあったのではないかと自分を責めた時もありましたが、自分が行っている治療が最善かどうかを日々振り返るようになりました。また、患者さんだけでなく家族の方のサポートの必要性も感じました。

私が、初期臨床研修の時に心がけていたことは、どんな時も笑顔で患者さんやスタッフの方々に接することです。3年目となった今でもそうですが、特に最初の2年間は事務仕事も含め、全てのことが知識となり、新たな仕事として習得する必要があります。病棟や外来で様々なことを頼られますが、忙しい時でも嫌な顔をせずに笑顔で引き受けられることが、円滑なチーム医療に繋がるのだと思います。チーム医療に必要なコミュニケーション能力を築いていくことも初期臨床研修医にとって大切なことだと思います。

指導医の先生方を始め、卒業臨床研修センターの方々など、多くの方々のサポートのおかげでとても充実した2年間となりました。これからは、初期臨床研修で学んだ事を基礎として、小児科医として精進していきたいと思えます。